

酒田市立文化資料館光丘文庫 第5回企画展示
冬の酒田の民俗文化Ⅱ 年中行事に見る黒森歌舞伎

【開催期間】令和7年2月8日(土)～4月13日(日)

くろもり かぶ き
黒森歌舞伎



「俵藤太幕（部分）」 明治35（1902）年制作、黒森歌舞伎妻堂連中所

黒森歌舞伎は酒田市黒森地域に享保年間(1716～35)に伝えられ、290年以上の歴史を持つ農民歌舞伎です。毎年旧暦の小正月にあたる2月15・17日に、鎮守日枝神社の奉納行事として上演され、雪の降りしきの中で上演されることから「雪中芝居」として親しまれています。その景観は昔から変わらず、今も残しています。



現在全国で行われている地芝居じしばいは200ヶ所を超えています。元々地芝居はその土地の祭礼や年中行事と結びついて行われてきていましたが、近年の社会構造の変化により、開催形態も村おこしなどの観光として行われてきています。



太夫振舞



例大祭



お面開き



寄せ太鼓

黒森歌舞伎は、歌舞伎が農村で祭礼と結びついて定着した過程を
日本で唯一残しています。

黒森歌舞伎の特徴

歌舞伎の古典的な3つの特徴が伝承されており、これも日本で唯一。

とても貴重な地芝居です。



女形を男が演じている



大夫・語りがそろっている



舞台を組む

黒森歌舞伎は2月15・17日正月公演の他、歌舞伎上演までに1年を通じて地域の祭礼と結びついた様々な行事を行います。それに係る費用は約500万円。費用は行政などの補助金には頼らずに、庄内地区の企業や黒森地域1軒1軒をまわり、すべて寄附によって賄われています。寄付のお返しは日枝神社のお札とお神酒です。

先輩たちの費用を集める苦労を見て、自分たちの代で絶やすことはできないという想いでこれまで保存・伝承されてきました

黒森歌舞伎の祭礼と年中行事

【太夫振舞 3月上旬】 たゆうぶるまい

一番最初に行われるのが来年の演目を決定する太夫振舞です。神社にて神事が行われ、籤者はお祓いを受け、祭壇に玉串を奉納します。神事後、籤者は演舞場の裏の井戸水を桶で七杯半の水ごりを取り身を清めます。

神社に戻り、白米を入れた一升枡の上においてある3つの演目の中から神意によって1本つり上げ、来年の狂言を決定します。



【例大祭 4月29日】

4月29日は黒森地区鎮守日枝神社の例大祭の日。この日は黒森歌舞伎が祭る八やちまた比ひ古こ大神の祭典も行います。

黒森歌舞伎の渡御行列には子どもたちが来年の正月公演の演目の衣装を着て仮装し、正月公演の演目の予告編としての山車行列と一緒に練り歩きます。
とぎょぎょうれつ

行列後、本年の神宿の主人など行列参加者は化粧や衣裳を着て仮装行列で来年の神宿の家まで行き、神宿渡しを行います。



【虫干し 8月上旬】

黒森歌舞伎は衣裳約500点、鬘かつら約50点を所有し、正月公演等で使用しています。これら衣裳や鬘は演舞場裏の蔵で保管され、虫干しは8月の天気の良い日に行います。蔵から出した衣裳や鬘は、神社の境内一面に張ったロープにひろげ虫干しを兼ねながら点検を行います。

干し終えた衣裳は演舞場に運ばれ、地域の手伝いの女性たちが一枚一枚たたみながら、翌年の正月公演や出張公演などに使う衣裳と使わない衣裳に分けられます。鬘は形が整えられ、衣裳とともに蔵で保管されます。



【花道づくり 2月13日】

昭和37(1962)年までは小屋立てと呼ばれ、地域各戸から1人ずつ出て仮設の芝居小屋を建てていました。昭和38(1963)年に現在の演舞場ができてから小屋立ては廃止されたが、花道づくりとして黒森地区の6つの自治会が順番に行っています。

神社裏の蔵の脇にある資材置き場や神社本堂の床下から材料が運び出され、黒森歌舞伎と自治会の人たちが一体となって花道が組み建てられます。

この他にも、正月公演の半年後の8月16日に翁おきなの面と三番叟さんばそうの面を箱から出して総点検をかねて三番叟を舞うお面開きが行われます。

正月公演の配役を決める役割や通し稽古のおさらい等のいろいろな祭礼・行事を経て正月公演を迎えます。

そして、正月公演を終えると、休むまもなく3月に、翌年の演目を決める「太夫振舞」が行われ、黒森歌舞伎の新しい1年がスタートすることになっています。



黒森歌舞伎の後継者育成と地域への取り組み

次世代を担う小学生を対象に、特色ある地域伝統文化の継承を目的として黒森地域が協力し、黒森少年歌舞伎は平成9(1997)年度より、少年太鼓は平成11年度より行われています。

11月上旬より本番に向けて週1回の練習を行い、歌舞伎、太鼓、笛それぞれ黒森歌舞伎の3人が講師として指導します。小学校においても、授業時間を調整したり総合的学習の課程に組み込む等、全面的に協力しています。



正月公演当日には、楽屋として自宅を貸して下さる方や、駐車場として自宅の敷地を開放して下さる方等、歌舞伎のためならばと、地域ぐるみで協力していただき、児童は正月公演の舞台に上がっています。

このように黒森の財産である「歌舞伎」を生で体験することにより、伝統文化の素晴らしさを知り、地域伝統文化の伝承を図ることができおり、また女子児童の創作太鼓等により新しい文化の創造にも貢献しています。



黒森少年歌舞伎



黒森少年太鼓

全国にある伝統芸能では、少子高齢化のための後継者不足が大きな課題となっています。黒森歌舞伎では、少年歌舞伎で舞台に上がった児童や地域の高校生との交流を図ることで「歌舞伎をやりたい」と若年層が毎年入ってきています。

幼少期から青年期と地域の伝統文化に触れ、地域への愛着と誇りを形成していくほか、自らも参画して行くことで人や地域との繋がりを築く力を身につけていきます。

そして、地域の一員として深く関わっていくことで、地域の一体感が醸成されるだけでなく、人に感動を与えることで伝統文化を継承していく心と生き甲斐も生み出しています。



黒森歌舞伎の保存と継承は、地域ぐるみで行う
地域の未来を担う「人を育てる活動」でもあります。

少子高齢化や過疎化の進展によって、地域文化の継承が困難となっている地域が全国的に増えつつあり、地域の未来と文化を担っていく人材の育成は、地域コミュニティの維持に必要な喫緊の課題となっています。

黒森歌舞伎の文化や伝統芸能の学び・継承の取り組みは、地域への誇りと愛着を育むと同時に、住民ひとりひとりが地域において自らの役割を果たし、互いに支え合っていくための地域社会づくりの素地として脈々と受け継がれてきました。先人たちが大切に守ってきた地域文化の灯を絶やすことはできません。



これからも黒森歌舞伎は地域の文化・伝統を大切に守り、
未来を担う人財を育てて参ります。